

論文要旨

専攻名 (又は推薦専攻名)	地域イノベーション学専攻	氏 名	こ 小 ばやし 林 たかし 隆	印
学位論文題目 城下町の伝統と持続可能なまちづくり ―彦根城下町の過去、現在、そして未来― (英訳又は和訳: A study on the history of the Hikone castle town)				
<p>日本では、これから、人口が急激に減少する。政府は、人口減少社会に対応するため、日本各地にさまざまな機能を集約したコンパクトシティを構築し、そこへの人口流動を考えているが、今から約400年前、すでに日本各地にさまざまな機能を集約した城下町が形成されている。それらの城下町は、明治時代以降も、それぞれの地域の社会状況に応じて、都市機能を変化させながら、城下町の伝統を有する中心市街地として存続していることから、それらの中心市街地を基礎にしてコンパクトシティを構築するのが望ましい。</p> <p>コンパクトシティの構築にあたっては、その都市の歴史を振り返り、その都市の特徴を生かした都市設計が不可欠であるが、日本国内の城下町については、誕生から現在にいたるまでの歴史を通観する研究が皆無に近い。そこで、江戸時代を代表する城下町だった彦根に焦点をあて、江戸時代の初めに彦根城下町が誕生し、明治時代に大きな変容を遂げながらも、滋賀県北部を代表する中心市街地として存続した歴史を通観し、現在の旧彦根城下における歴史まちづくりの方向性を確認したうえで、今後の彦根のまちづくりを展望する。この検証作業は、今後の日本国内におけるコンパクトシティの都市設計のモデルケースになるはずである。</p> <p>16世紀末に日本国内を統一した豊臣秀吉は、古代の中国と日本の政治のしくみを念頭に、新たな統治体制を構築した。それは、天から地上の支配を委ねられた天皇の代行者である天下人秀吉が、配下の有力武将を貴族化し、武士が日本国内の軍事と政治の両方を掌握するという統治体制だった。</p> <p>豊臣秀吉の没後、天下人の地位を引き継いだ徳川家康も、征夷大將軍に就任するとともに右大臣の職につき、日本国内の軍事権力と政治権力の両方を掌握した。江戸時代の政治体制は、主君の家の当主と家臣の家の当主が主従関係を結んで家中を形成し、家中が組織的に統治を行なった点に特徴があるが、家康は、主従関係を結んだ有力武将に日本各地の城郭・領地・領民を預け、その地域の軍事と政治を任せた。武将たちは、配下の武士たちを城やそのまわりに集住させて家中としてまとめ、領内の統治を組織的に行なった。城やそのまわりには、武士の暮らしを支える町人(職人・商人)も集まり、城を中心とする城下町が形成された。</p>				

ふり 氏	がな 名	こ 小	ばやし 林	たかし 隆	印
---------	---------	--------	----------	----------	---

彦根城下町を形成した井伊家は、もとは遠江国井伊谷（現在の浜松市北区引佐町）を本拠とする在地領主だったが、天正 3 年（1575）に井伊直政が徳川家康に召し抱えられ、天正 18 年（1590）に上野国（現在の群馬県）の箕輪城を預けられたことによって、在地領主から軍事と政治の両方を担う統治者になった。井伊家は、慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦いの直後に近江国（現在の滋賀県）に移され、慶長 9 年（1604）に彦根城と彦根城下町の建設を開始した。その後、井伊家は、江戸時代を通じて、彦根城主であり続け、彦根城下町は、領内の商業都市である長浜と連携し、軍事・政治都市として拠点都市としての役割を担い続けた。彦根城は、内堀・中堀・外堀の三重の堀が巡らされ、堀によって区画されたエリアごとに身分による住み分けが行われていたが、彦根城の中堀より内側に住まいを設けられた城主と重臣たちの合議によって統治方針が定められた。城主と重臣たちは、軍事と政治の両方を担う統治者としての立場を保つため、下屋敷などにおいて文武両道の修養を重ねた。

慶応 3 年（1867）の徳川慶喜による大政奉還を契機に、日本が大きく変わった。城郭に集住する武士が軍事と政治を掌握する統治体制が否定され、天皇のもとで、身分にかかわらず、有能な成人男性が政治・行政や軍事を担う中央集権的な体制が構築された。軍事・政治拠点としての役割を失った日本国内の多くの城が壊された。彦根城も軍事・政治拠点としての役割を失い、明治 11 年（1878）に解体の危機に直面したが、地元住民の願いを明治天皇が受け入れ、永久保存されることになった。彦根城は、江戸時代の武士による統治の歴史や城下町としての歴史を伝えるランドマークとなり、旧彦根城下に教育のまち、ものづくりのまち、観光のまちとしての役割が付加され、中心市街地としての地位を保った。

彦根市は、昭和の高度経済成長期以降、山間部と旧城下で少子・高齢化が進み、平野部で新興住宅地の建設が進んだ。平成の大合併にあたって、彦根市は、近隣自治体との合併を選択せず、既存の枠組みでまちづくりを進めた。旧彦根城下では、学校や工場の再編・郊外移転が進み、教育のまち、ものづくりのまちとしての役割が薄れたが、国の文化財に指定され、世界遺産登録をめざす彦根城がまちのシンボルであることに変わりはなく、武家屋敷や町家などの歴史資産が数多く残り、城下町の風情が保たれている。今後、城下町としての伝統を活かした歴史まちづくりを進めることによって、城下町らしい暮らしに愛着をもつ住民の定住をはかることが可能である。これまでの歴史や現在のまちづくりを踏まえると、歴史・観光都市としての未来を拓いていくことが、彦根のまちの強みを最大限に活かした取り組みである。